

平成 27 年度入学式 式辞

春の息吹と柔らかな瀬戸内の光が満ち溢れるこの広島の地に、687名の皆さんを県立広島大学の新生生としてお迎えできましたことは、私達の大きな喜びとするところです。おめでとうございます。併せて、入学許可を受けてここに立たれている皆さんをこれまで支えてこられました保護者の方々に、県立広島大学を代表いたしまして心よりお祝いを申し上げます。おめでとうございます。さらに、ご多忙の中、本日は湯崎広島県知事を始め、ご来賓の皆様にご臨席いただき、誠に有り難うございます。

それでは、皆さんが門をくぐられました、我が大学についての紹介をしたいと思います。本学は、2005年4月に広島市における県立広島女子大学、庄原市の広島県立大学、そして三原市の広島県立保健福祉大学を再編・統合し、新たな県立広島大学として開学しました。前身の大学の歴史を辿れば、95年前の県立広島高等女学校の専攻科設置に由来している、歴史ある大学です。また、日本芸術院会員で、3年ほど前に文化功労者になられました作家の竹西寛子先生、アフラック日本支社の創設者である大竹美喜先生を始め、現在まで、約3万人の同窓生を輩出しています。本学と同窓生は堅い絆で結ばれ、県立広島大学同窓会の下、本学の運営や、学生の皆さんに対し、様々な形で温かい励ましや、御支援を頂いております。

次に本学の現在の姿についてお話しを進めることにします。明確に言えることは、統合前の3大学に共通していた真摯に勉学に取組み、地域に寄り添いながら歩む大学の姿は、現大学でもしっかりと継承されていることです。その上に、結束することの大切さを説いた有名な毛利元就の三子教訓状ではありませんが、統合後の10年を経た現在、東ねられた一つの大学としてさらに発展した、確かな歩みを見ることができます。

例えば教育について言えば、本学の全授業に対する学生の満足度調査結果は、統合初年度は80%でしたが、組織を挙げての授業改善の努力により、毎年上昇を示し、昨年度は94%にまで達しています。学生が授業に満足を感じることは、大学の教育成果を上げるための何よりも重要な前提条件となります。

一方、研究についてはどうでしょうか。文部科学省からの科学研究費助成事業の採択件数は、大学研究力の指標とされていますが、その数値は、統合後著しい上昇を示し、昨年度は統合前の2倍以上、106件の採択件数に達し、この8年間、中・四国・九州26公立大学の中では際だったトップの座に位置しています。特に女性教員の研究力の高さには目を見張るものがあり、文科省が発表した昨年度の女性教員採択比率では、女子大学ではないにも関わらず、お茶の水女子大学、奈良女子大学に続いて全国第3位に位置しています。こうした教育力と研究力は、相乗効果を発揮して本学の誇るべき資産となり、我が県立広島大学の教育・研究を推進する力強い底力となっています。

学生も負けてはいません。本学学生の勉学に取り組む姿勢にも、目を見張るものがあり

ます。例えば、数値で示せるものとして国家試験の合格率を取り上げます。昨年のデータで言えば、管理栄養士、看護師、助産師などは全員合格、100%の実績を残しています。特に管理栄養士については3年連続100%でしたが、これは全国で2大学のみ、また社会福祉士国家試験の合格率は71%でしたが、受験者総数50名以上の大学にしばると全国第1位、他大学をはるかにしのいでいます。その他の国家試験におきましても、全国でトップクラスの成績が得られており、真摯に勉学に取り組む伝統がしっかりと新大学にも継承されていることを裏付けています。しかし、ここで強調したいことは、私達の大学は、単に合格率を誇るレベルの大学ではないということです。私たちは、さらにもう一段高い力を皆さんに求めています。

その高い力とは、一言で言うと『高度な実践力』です。説明を加えますと、XはYである、こうした知識を数多く記憶してきたのが今までの小学校から高校までの学びでした。大学では、それだけでは不十分です。XがYである理由を検証し、その理を深く理解し、併せてXがYであることを、この社会に何か応用できないかということ自ら考えぬく、この一連の過程を身に付けることがここでいう高度な実践力です。言葉を変えると、知識を生きたものに変える力こそが実践力であると言えます。私達の大学では教育目標のトップスローガンに実践力のある人材の育成を掲げて、その力の養成に取り組んでいます。社会に、高度な実践力を備えた優秀な人材を送り出すのは、公立大学としての重要な役割だからです。

実践力を育てるには、皆さんの心の中にそれは何故だろうかという疑問を絶えず発し、問題に対する発見力を磨いておくことが求められます。実はこの疑問を持つ問いかけこそが、文明の進歩の原動力であり、人間に学ぶ喜びを与えてくれます。例を挙げてみます。夏の日、家の前に淡いピンクの朝顔に似た花が咲いていました。何という花だろう。調べると浜昼顔でした。これは海岸に咲く植物です。海から離れたこの地に何故生えているのだろうか。調べると、どうやら家の前の広場は、海砂で整地されたそうです。問いかけはさらに広がります。朝顔があつて昼顔があるなら夕顔という植物があるのでしょうか。調べるとあるのです。昼顔や朝顔とよく似た同じヒルガオ科の植物です。そしてこの夕顔の実は、巻き寿司に使われる干瓢ということが分かりました。そういえば、源氏物語54帖の4帖目は夕顔の君の章になっています。確かに源氏物語絵巻図には、夕顔の君と粗末な庵が、そして、その家の垣根には、さびしそうな白い夕顔の花が描かれています。干瓢を食べるために植えられていたのでしょうか。光源氏が恋をし、やがて急死したあの不幸な夕顔の君が余計哀れに思えます。これは私の経験でしたが、家の前に咲いていた昼顔から源氏物語の世界まで、疑問は疑問を呼び、様々な知る喜びを味わうことができました。

疑うが故に知り、知るが故に疑う、これは明治時代の物理学者であり、漱石門下に入りしていた随筆家、寺田寅彦の言葉です。皆さんは、これから多くの学問分野で問いかけを自ら積極的に発し、知ることの喜びをできるだけ多く実感して下さい。積極的に疑問を抱き問いかける姿勢こそが、社会で求められる実践力を身に付けるうえでの礎になるか

らです。

皆さんが学び、知る喜びを味わうと同じように、私たち県立広島大学教職員には、そうした皆さんの成長から、たくさんの喜びを頂いています。最後に私が頂いた多くの喜びの中から一つの例を紹介します。

Aさんは、ガンで親を亡くし、女性ながらもビルの夜警のアルバイトをしながら学業を続けた学生でした。大事な友人を神戸大震災で失ったことから、一時言葉を発せられない状態で私の研究室に入り、その後、卒論では意欲的に生命科学分野の研究に取り組みました。企業に就職してもその研究への想いを遂げようと退職し、東大大学院、その後はハーバード大学の経営専門職大学院でいわゆるMBAを取得するなど、食欲に自分の実践力を鍛え、世界を広げて行きました。先月、Aさんから医療研究に係わる行政機関の重要なポストに就くことを報告したメールをもらいましたが、そのメールに記してくれた、研究室で学んだことが全て今の自分の原点になっているという感謝の言葉、私は何度も何度も読み返し、精一杯励ましのメールを返しました。

過去は変えられません。未来のあなた自身は、これから自分で作ることができるのです。全ては今からです。高校までの自分では、皆さんは社会に対してまだ何も回答を出していないことを自覚してください。自ら積極的に学ぶ力を基礎にし、知る喜び、学ぶ喜びを限りなく多く本学で体験してください。その喜びは、やがて社会に巣立つみなさんにとって大切な、高度な実践力を鍛えていくはずです。

最後に5年前に亡くなった事業家であり、多くの啓発を私達に与えてくれたジム・ローンの言葉を紹介いたします。

「収穫は種を植えた人だけに訪れる。祈った人ではない」

私達、県立広島大学教職員一同は、皆さんの積極的な学びを基にした、豊かな学生生活を心から支援していくことを誓い、結びの言葉に代えたいと思います。

平成27年4月3日

県立広島大学長 中村 健一